

近所の農家さん

もんま
門馬

あつし
睦さん
(48)

(日の出地区)

「いつかイチジクを主力にした観光農園をつくりたい」。日の出町で露地野菜を栽培する門馬さんは、新



たな目標に向けて歩み始めている。

門馬さんは2015(平成27)年に新規就農した。それまでは父親の後を継ぎ、立川市でパン屋を営んでいた。

しかし、経営の難しさを感じる中、東京都が新規就農者への支援を進めていたことをきっかけに、幼い頃から抱いていた農業への思いを実現することを決意した。

幼少期は、両親がパン屋

の仕事で忙しかったことから、母方の実家で過ごすことが多かった。畑は遊び場であり、叔父が農作業をする姿を見て育った経験が、農業への憧れにつながったという。

就農に向けては、日の出町内の農場で研修を受けながら栽培技術を習得した。一方で、自ら町内を歩き、農地を貸してくれる人を探して回った。一軒一軒声を掛け、少しずつ農地を確保。

現在は約2ヘクタールの圃場で、ナスを中心にネギやブロッコリーなどの露地野菜を栽培し、日の出町ふれあい農産物直売所や近隣スーパーへ出荷している。

就農から12年目を迎えた今年、新たな挑戦としてイチジク栽培を始めた。パン屋時代に販売していた「イチジクとクルミのライ麦パン」が好きだったことや、使用していたドライイチジクの多くが外国産だったこ

とから、「国産イチジクには可能性がある」と考え、就農当初から栽培を希望していた。

しかし、イチジクは定植後3年間ほど樹の生育を優先する必要がある、就農直後に取り組むことは難しかった。「まずは野菜づくりで経験を積み、経営を安定させてから挑戦しようと考えていました」と振り返る。

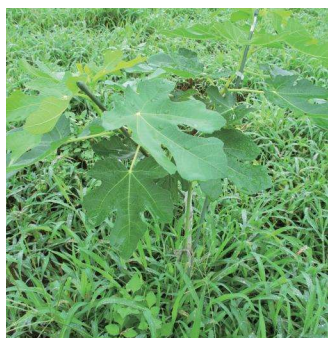
今年3月には100本の苗を植え付けた。今後は少しずつ本数を増やし、ブルーベリーの摘み取り園のようなイチジク観光農園を目指す考えだ。

初めての果樹栽培だけに、栽培技術の習得にも余念がない。イチジクを特産品とする埼玉県川島町へ足を運び、圃場を見学。各地の生産者にも積極的に話を聞き、都西多摩農業改良普及センターにも相談しながら知識を深めた。

また、「この10年はほとんど休みなく働いてきました。年齢とともに体力の変化も感じています。イチジクへの転換は、働き方を見直す意味もあります」と、将来を見据える。

一方で課題もある。イチジクは暑さには強いものの寒さに弱く、定植直後には寒波の影響で数本の苗が枯れた。冬場の防寒対策を検討しながら、樹の成長を見守っている。

パン職人から農業の世界へ飛び込み、野菜づくりで経験を積み重ねてきた門馬さん。新たな挑戦を続ける姿は、地域農業の明るい希望となっている。



元気に育つイチジクの苗